

2005年09月18日
日本教育心理学会第47回総会@北海道遠井学園

若松義亮・下村英雄(企画シンポジウム)
就職と自己―「自己分析」という迷宮―

就職問題への自己システム論的把握

山田 剛史 (Tsuyoshi YAMADA)
(京都大学高等教育研究開発推進センター)

1

―就職問題を取り巻く現状―

2

―問題の構造―

- 上記のような諸問題は、**自己分析の難しさ**を引き起こし、さらには**フリーター**や**ニート**といった具体的かつ重大な社会問題を引き起こしている。
- 各大学や省庁、専門家は、こぞって対抗策を練っている。
→さらに、多くの**実態調査**が行われ、書籍も多数刊行されている。
- 研究者は、進路選択に**直接関わるであろう要因**を探求し、検討を重ねている。
→設定される要因は、自己効力感や進路未決定感、就業動機などの**内的変数**が圧倒的に多い。
- しかし、学年や時期固有の**文脈**を考慮した調査や縦断研究による**プロセスモデル**の提案など、よりダイナミックな検討を試みる研究もみられるようになってきている。

3

―新たな展開への糸口―

- 1. 就職問題を包括的・相対的に捉える視点の欠如**
―就職以外の問題から眺めてみる
―内的要因(感情・評価・意味づけなど)と外的要因(経験・活動・体験などの相互作用的視点)から眺めてみる
- 2. 「自己」という現象(概念)の曖昧さ**
―自己とは何か?を問う
―「自己」分析=「私」ではない
- 3. 非決定性・非線形性的視点の欠如**
―「変化」をどう捉えるか?

4

―本発表の目的―

- 大学生における「進路意志決定に伴う自己分析」の問題に対して、「自己の世界」からの説明を試みる。
- 主に、「**自己**」と「**社会**」の適切な**サイズ**(下村, 2005)の問題に焦点を当てる。
- 具体的には、実際のデータを挙げながら、「システム論」という認識論的枠組みを援用し検討を行う。

5

データ①(量データ)

「安定志向」と「やりたいこと志向」

問題:「**やりたいこと志向**」という言葉が、昨今の大学生の職業選択心情の1つとして付与されている。溝上(2004)は、この現象を「**アウトサイド・イン**」から「**インサイド・アウト**」への移行として説明している。この点に関する実際の調査データ(溝上・山田・奥田による共同研究)を2つの観点から見てみる。

a.「**学年差**」の観点から
対象者: 関西・関東の国公私大の大学生447名
調査時期: 2004年7月～9月
質問項目: 「将来を考えるとあなたの生き方は・・・」という指示に対し、下図にある数直線上に○印をつけてもらう。左から0～10までの11段階。

6

得報酬をやりたいかというこ
 とよりも、大学を卒業して、
 できるだけ安定した仕事（た
 とえば大企業、高収入）につ
 くことが重要だ

安定した仕事（たとえば大企
 業、高収入）につくことより
 も、自分のやりたい仕事にこ
 だむ方が重要だ

結果：学年を独立変数、職業観の得点を従属変数とした1要因分散分析を行ったところ、1%水準で有意差がみられた($F(3, 443)=4.27, p<.01$)。多重比較(LSD)の結果、1年生(5.82)、2年生(5.87) < 4年生(7.25)であった(3年生は6.60)。

* 低学年から高学年にかけて「アウトサイド・イン」から「インサイド・アウト」へと移行していくことが示された。

b.「重要活動」の観点から
 対象者：関西・関東の国公私大の大学生464名(調査時期は同じ)

7

調査項目：上記職業観の項目に加え、山田(2004)で用いられた重要活動を選出する項目。

結果：6つにカテゴライズされた重要活動を独立変数、職業観の得点を従属変数とした1要因分散分析を行ったところ、1%水準で有意差がみられた($F(5, 458)=3.47, p<.01$)。多重比較(LSD)の結果、自己研鑽(6.77) > 学業(5.48)、アルバイト(5.69)、生活習慣(5.47)、クラブ・サークル(6.47) > 学業(5.48)であった(遊び・対人関係は6.09)。

* 授業・講義を中心とした学業活動を重視する学生は、趣味や資格取得のためのダブルスクールなど自己研鑽活動を重視する学生やクラブ・サークルを重視する学生に比べて、低い「やりたい志向」を有していることが示された。

8

2つのデータから・・・

やはり現代の大学生は、「やりたい志向」の職業観を有していることが示された。具体的に、その傾向は学年が上がることに強くなること、主体的な意志・選択を要する活動に従事している学生は、大学生生活の中心活動である授業・講義を重視するものよりも「やりたい志向」がより強いことが示された。

一量的観点から大枠として、現代大学生の就職に対する志向性を伺い知ることが出来たが、その心理の力動・プロセスについては見えてこない。

(* 他の変数による検討も行ったが、やはり変数設定からトップダウンによる入り方には限界がある)

↓そこで・・・

就職問題(心性)を、より包括的な「自己」の視点から、システム論という認識論を援用して捉えてみる。

9

前提1: システム論とは？(山田, 2005)

システムとは...(内木, 2001)

- (1) 可変状態をもつ複数の要素の集まりで構成され、
- (2) 要素間に何らかの一定の相互関係があり、
- (3) 全体として1つの機能を実現するような何らかの秩序が存在する対象

システム論とは...(河本, 1995)

第1世代「一般システム論」・・・動的平衡系。定常的形態や定常的關係の秩序維持がシステムの主要現象。
 第2世代「自己組織化」・・・動的非平衡系。生成プロセスが次の生成プロセスの開始条件となるように接続した生成プロセスの連鎖(河本, 2000)。
 第3世代「オートポイエーシス」・・・自己産出。反復的に要素を産出するという産出過程のネットワークとして、有機的に構成されたシステム。

10

前提2: 自己をシステムとして捉える

Step1: 自己は常に「ゆらぎ」や「非決定性」を抱えている
 Step2: 自己は「意識」と「経験」の絶え間ない作動の連鎖によって生成される
 Step3: そのプロセスは「自己組織化」として立ち現れる
 Step4: 故に、自己は「創発」現象である 自己は漸次実在性を獲得している

図9-3 創発モデルを組み込んだハイパーサイクル・システムとしての自己形成

11

前提3: 就職問題への自己システム論的把握

ささまざまな「私」(溝上, 2004, p.179)

学生たちは、自覚的・無自覚的に、大学生生活の限られた時間をさまざまな「私」に分割して、その有機的連関をはかりながら生活をしている。

一つの「私」にこだわれば、他の「私」がおろそかになる。

⇒さまざまな「私」の有機的連関の全体性が、自己感情の総体をつくり上げる。

図4-5 システム化された大学生活

* 自己の世界におけるシステムと生活者としてのシステムとの「せめぎ合い」の中で就職の問題が浮上してくると思う。

12

データ②(質データ)

大学生生活展望:活動と進路選択

問題:上記で得られた結果(「研究者から見た大学生」)を意識しながら、以下では「大学生から見た」就職問題について検討を行う。具体的には、大学生生活の中でも最もゆとりのある時期にある2年生、就職問題に意識が向きつつある時期にある3年生に焦点を当て、進路選択問題を含めてこれからの大学生生活をどのように展望しているのか(大学生生活展望)といった観点から検討を行う。

対象:関西の非伝統校大学の2・3年生30名

調査時期:2003年7月~8月

質問項目:質問①「今現在から卒業までの残りの大学生生活で、今後行おうと思っていることはありますか?」/質問②「今現在、進路について何か具体的なものは考えてますか?」

13

例1:自己分析(△)-進路(×)-活動(○)

質問①

クラブ活動もそうですし、まあ就職のためにも資格取得を目指して、そっちの方で一生懸命頑張って資格をゲットして、まあそこから自分が将来何になりたいのか、っていうのを決めたいんで、まだ今ところは、ちょっと決まってないです。(2年生Yくん)

質問②

たぶん、取れるだけの資格は、興味がある分とっていききたいなあっていうのと、今は学校とバイトしか生活がないけど、もっと違う勉強を省いての興味の分野とかも広げていって、もっと色々な人を見てみたいと思っています。(2年生Hさん)

ポイント

先に目標や進路がありきではない。クラブ活動や学業、アルバイトといった現座の大学生生活に積極的にコミットしようという意志が見受けられる。そこから将来の問題に入っていく。(自己<社会)

14

例2:自己分析(○)-進路(×)-活動(×)

質問①

ないですね。見えてないですね。目先ぐらいしか追えてないんですよ。来年こんなんでしょうか、これせなあかんなあゆうのがないんですよ、自分の中に。

語学系で資格を取ろうって思うのは?

それも言われたらイタイんですけど、全然取る気とかないんですよ。留学しようとか全然思わないし。ただそれを取っといたら社会っていうか会社で有利やろうなっていうような考え方がないですね、自分の中で。

(2年生Oくん)

ポイント

自己分析・自己理解はなされていない。が、自らの将来展望が描けず、その状況を打破するべく、一般的な社会通念に併せて、自己を位置づけようとしている。(自己<社会)

15

例3:自己分析(○)-進路(○)-活動(×)

質問②

進路について...やっぱり認定心理士だけじゃ不安なんで、臨床心理士の資格を取りたいなあと思ってるんだけど、大学院に行かなければ資格は取れない。となると、院に行くだけの実力が自分にあるのか?っていうと、確実に院に行くだけのものが自分にはないのが自分には見えてるけども、すごい自分は結構他人に厳しくせに自分に甘いていうめっちゃくちゃな性格をしてるから、院に行くには英語が絶対必要やでって分かっているのに、英語が自分の中ですごい苦手、だから英語に手をつけずほったままみたいな状態で。行きたい、やりたい、って思ってるのに、そのために必要なことをしていない。(3年生Iさん)

ポイント

自己に没入している。3年生ということもあり、焦りが一層の不安をかき立て自己否定の物語を産んでいる。同じ活動がなされていない状況でも、進路目標がある方がより強い負の感情をもたらす。(自己>社会)

16

例4:自己分析(○)-進路(○)-活動(○)

質問①

来年に1年間留学して、それで4年生の時に認定心理士を取って、そういうできればなって思ってるんですけど。

留学をするために必要なことって何かあるんですか?

単位をちゃんと取ってからでないといけないし、TOEFLの点数もちゃんと上げないといけないし、その勉強はしっかりしないといけないんで。

そういうのは今現在取り組んでおられるんですか?

はい。

(2年生Aさん)

ポイント

将来の目標は「ある程度(“不安”という不確定要素も付随している)」明確に定められており、またそれを実現するための方略も有している(自己=目標)。活動が構造化されている。そしてその方略は実際に実行されている。(自己=社会)

17

一まとめ

●「自己分析」が出来ていないのではない!?

Step1:自分は何のような人間なのか?

Step2:自分は何がしたいのか?

Step3:自分は何をすればいいのか? ←ここでつまずく

Step4:実行しているか否か?

逆のStepを迎る青年も見受けられる

●認識内の「時間の構造化」と現実世界における「時間のマネジメント」が必要!

●自己にこだわることは是か否か?

「是」

但し、経験なきところに自己は成立し得ない。故に、肝心なのは自己と外界とのバランス調整にある!

18

—引用文献—

- 河本英夫 1995 オートポイエーシス—第三世代システム— 青土社.
河本英夫 2000 オートポイエーシス2001—日々新たに目覚めるために— 新曜社.
溝上慎一 2004 現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる— NHKブックス.
下村英雄 2005 就職問題から示される新たな自己モデルへの期待 若松養亮・下村英雄(企画シンポジウム) 就職と自己—「自己分析」という迷宮— 日本教育心理学会第47回総会発表論文集(発表資料)
内木哲也 2001 システム分析 「複雑系の事典」編集委員会(編) 複雑系の事典—適応複雑系のキーワード150 朝倉書店.(Pp.134-136)
山田剛史 2004 現代大学生における自己形成とアイデンティティ—日常的活動とその文脈の観点から— 教育心理学研究, 52, 402-413.
山田剛史 2005 システム論的自己形成論—複雑系とオートポイエーシスの視点から— 梶田毅一(編) 自己意識研究の現在2 ナカニシヤ出版.(Pp.183-202)



19

ありがとうございました。

ご意見や入手しにくい論文などありましたら
下記までご連絡下さい

t-yamada@z05.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

20